

奈良念
佛寺藏 淨土系譜考

— 東暉上人小傳 —

鵜飼光順

一 序

檀王法林寺現董信ヶ原良哉師は同寺開山袋中上人三百年遠諱大法要を有縁道俗の隨喜協贊裡に盛大に勤修し、先德仰鑽の誠を顯はされたのは昨昭和十三年の春の事であつた。上人大遠忌の前奏曲も云ふべき遠諱鑽仰會が組織せられ、準備工作として、先づ上人の靈跡探查が始められた昭和七・八年の頃であつたか、小生も林彦明師、江藤激英師等遺跡參拜の一行に加はり奈良市漢國町念佛寺(現董三宅勇誠師)を訪れた。其折眼福を得たものゝ中袋中上人の弟子東暉良閑上人のものせる元祖法然上人以下鎮西白旗流の諸師列系を顯示せる興味深き淨土系譜(假名)一卷があつた。鑽仰會員にして袋中の全的研究に當つてゐられる嵐瑞激學兄が借覽せられし折、拜借し轉寫してゐたのであるが、以來今日迄注意するの機にめぐまれません、偶々東暉傳歴研究を志ざし、その一端も云ふべきこの淨土系譜解説研究を試み、附録として系譜を轉載した。この拙き小論を發表するに當り、信ヶ原師は檀王所藏本の閱覽の便宜を與へられ、又嵐學兄より袋中、東暉に係る色々の指示を得た。特記して多謝し、大方の叱正を乞ふ次第である。

二 本系譜概観

奈良念佛寺藏「淨土系譜」(假名)は幅 35.5 cm 全長 480 cm の卷子本、紙質書體より徳川初期のもの、宗祖以下法蓮、聖光、隆寛、幸西、善慧等法孫弟の略系を列記し、特に鎮西聖光のもこ然阿良忠、寂恵、定恵、聖滿、了專等三次第し且各々簡單なる小傳を附如し、最後に他の「諸系譜」に見らるゝが如く、淨土先達として、顯眞・明遍・覺喩・明禪・靜遍・良遍等を連ね、各宗名匠が宗祖に歸仰せし狀を明示してゐる。

始めに法蓮房信空並に長樂寺流元祖と銘打つて信空・隆寛の法孫弟、然して、成覺(一念義元祖)善恵等異解異門の法系を明示すれども、聖光―良忠―寂恵―定恵―蓮勝―聖滿等三次第系列を明瞭にし、且各々小傳註記なき附加してゐる點より見るに「淨土鎮西白旗流系譜」なる事は極めて明瞭である。

而して、宗祖のもこ聖光

辨阿善導寺開山

然阿

辨阿付弟光明寺開山

寂恵

然阿付弟光明寺二代

定恵

寂恵付弟光明寺三代

聖滿

定恵付弟光明寺四代

了專(光明寺五代)

良叫(光明寺六代)

慶順(光明寺七代)

祐崇(光明寺八代)

正空(光明寺九代)

智聰(光明寺十代)

記順(光明寺十一代)

良記(光明寺十二代)

良把(光明寺十三代)

と列記し、上記の如く光明寺各何代

と傍註記してゐるのである。光明寺とは云ふ迄も無く淨土宗三祖然阿創建の檀林鎌倉材木座の光明寺なり。然らば本系譜は光明寺累世を示す、「鎮西白旗流光明寺系譜」にも稱さるべき性質のものである。

然しながら光明寺累世歴代も僅かに十三代を明示註記するに止まり、(淨全本所收攝門の光明寺志歴代と異なる點注意せねばならぬ)

正空

智聰

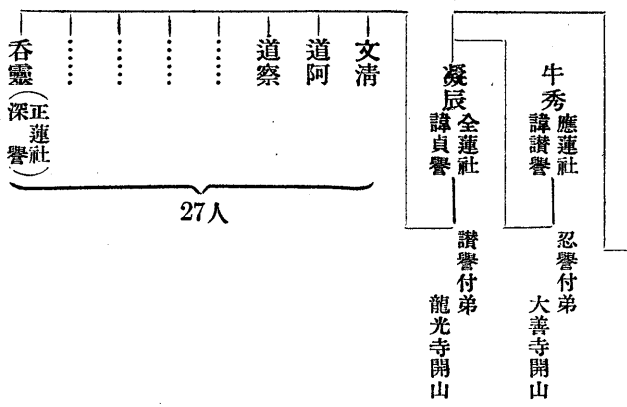
貞案

天蓮社 諱忍譽

法譽付弟

相即寺開山

正空、智聰、貞案のもし牛秀、凝辰の次弟し、凝辰の付弟文清、道阿、道察、呑靈等廿七人を列記し、正蓮社深譽、呑靈のもし堯山良往以下



呑靈

堯山良往 <small>生蓮社</small>	免隨良擔 <small>基蓮社</small>	學殘良通 <small>殘色蓮社</small>	一鶴良圓 <small>滿益蓮社</small>	典會良深 <small>傳心蓮社</small>	長吞良住 <small>定長蓮社</small>	曆殘良正 <small>正念蓮社</small>	文閣良覺 <small>文成蓮社</small>	空山良等 <small>信一蓮社</small>	東輝良閑 <small>玄定蓮社</small>
-------------------------	-------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------

東暉に至る十名を連記し、最後は定蓮社玄譽東輝良閑註1を以て終つてゐるのである。然らば一應東暉傳持の系譜にして彼自身の本系列、法脈を表示するもの云ふべきである。東輝良閑は後述する所であるが、名越流袋中良定の愛弟にして、恩師袋中の遺徳顯彰の爲に盡粹精進、師のものせる幾多の著書は殆ど彼れ東暉の筆寫せるもの、現に袋中に關する法林寺藏書中東暉の奥書あるもの數十部に及び、彼れの自筆傳法切紙等現存するもの至つて多い。

今本系譜(以下念佛寺系譜或は念佛寺本ト呼ブ)ニ法林寺藏東暉自筆の鈔本等を比較考究すれば、その書體より見て、念佛寺本は恐らく東暉が晩年某本により自筆轉寫せしものでなからうか。

何れにしてもこの念佛寺系譜は東暉の法脈源流を明瞭にし、正脈傳承系列なき興味深き問題を提供するものなることは云ふ迄もない。

三 本系譜と淨土諸譜脈

今、念佛寺系譜を詳細に點檢すれば、その系流系列の内容、様式が、現行流布の筆寫本「蓮門宗派」(天文十^七年頃)所收第二圖鎮西系譜ニ殆ど合致する。然れども細註に於て聊か異なる點あるも恐くは書寫の原本の相違か、或は當時の脱落なるものが多いのであらう。然し尙興味深きは、「念佛寺系譜」ニ「蓮門宗派」(第二圖)ニ、嵯峨正定院藏^註「白旛總系圖」ニ「淨土源流(章)圖」^註所收第四圖の「師圖」ニの四本は、其の作圖様式に於て些か變化する點あるも、(淨土源流章圖第四圖は前三本と異なる)形式内容に於て殆ど一致し、轉寫誤寫脱漏の甚しき點多々あり、試みに、元祖源空上人のもこ、法蓮房信空の項に至る系列を比較すれば

(念佛寺本)

元祖源空上人

(小傳アリ。附錄參照)

○宗祖ノ小傳ハ各本共大同小異
細註ニ於テ異ル點アリ。

法蓮

諱信空左辨藤行隆號白川上人
始師事寂空後從空上人建曆二

年當六十七歲安貞二年戊子九
月九日入滅時年八十三

正信

諱湛空

正覺

(蓮門宗派本)

元祖源空上人

(小傳アリ)

法信、又號法蓮

正信

正覺

敬西

○(小傳アリ。左大辨藤行隆長男也イフ、他念佛寺ハ本ニ同ジ)

諱信瑞書甚多弘安二年十月日亡

書甚多弘安二季十月日亡敬西諱信瑞

淨意

諱叡澄大納言公氏息

淨意

(正定院本)

元祖光照上人?

法然上人 (小傳アリ)

法蓮(小傳アリ、念佛寺本ニ同ジ)

正信、淨意、正覺

の如く、各本共、源空上人、法蓮房信空の小傳に於て或は各註解に於て殆き一致する點を見る事が出來、其中、蓮門宗派は、法信こ記し又號法運こ傍註すれば、源流(章)圖所收「師圖」は、前三本の作圖形式を離れ説明註解の様式を採り元祖法然上人のもこ以下小傳(念佛寺本ト大同小異)を載せ、

法信の右に傍註して(法蓮信空ヲ略スル歟)こ書き、續いて「諱信空左大辨諱寂證大納言藤行隆號白公氏息川上人始師ト事寂空ト後從ニ空上人建曆二年當ニ六十七歲ニ安貞二戊子九月九日入滅時年八十三」

○正信 ○正覺 ○淨意 ○敬西(諱信瑞書甚多 弘安二 亡)

こ説示してゐるが、師圖に於ける信空の小傳は、正覺の傍註こ混同錯雜せしもの、之に依つて察するに師圖は前三本か或は同類原本より轉寫せるものなるこは明瞭である。

嵯峨正定院本は、元錄四年湛譽了鑑が、書寫せし系圖にして、しかも彼の奥書に依れば、此の白旛流の所圖の總系譜註4は、西山總系譜、圓通寺尊觀流の系譜、血脈論等こ異り、了譽の直牒に載せる總系圖か、作者未詳なれこも初め四流の題下に圓蓮社こあれば、良順の圖する所か。今類本を以て校合し、文字の錯亂せる、眞偽の無分別なきを數回添削檢點すこて、二、三の考證をする所あれば嵯峨本も、後の轉寫なる事又明瞭である。されば、各本共同一原本か、同一異類本かに依り轉寫か、轉々寫か、兎も角も、嵯峨本の細註には「是より下異本」こか「異本有之」こなき細註ある所より見るも、異本も數種ありたる模様にして、少くこもかゝる鎮西白旛系譜の轉寫流行は、異流異派の學解の流行の裡にその派内教壇人こしての正統嫡流を高調すべき機構事態に即應せるものこ考ふべく教團發達史研究上興味ある一の示唆を示すものであらう。

而して各本の系列に従へば白旛嫡系を明瞭に指示する寂惠のもこ定惠一聖滿一了專一良吽一祐崇一智聰一貞安一受貞一專等こ次弟し、嵯峨本は惠等のもこ是迄異本こ傍註すれば此等の白旛系譜は、貞安の法孫弟のものせるものなるかの

推考がなされるであらう。

四 東暉と念佛寺系譜

今東暉の念佛寺本に依らば白旗本系譜に加ふるに前述せる如く、鎌倉光明寺歴代を明示し、貞案（天蓮社忍譽、法譽付弟相即寺開山）の弟子、並に牛秀（應蓮社忍譽付弟大善寺開山）の法系列に凝辰（全蓮社貞譽）を配し、付弟を連ね、吞靈のもこ、朱字にて吞靈付弟として、前圖の如く名越流一統の法系を示し東暉自身に至つて擱筆してゐる。

東暉、字良閑、定蓮社立譽勇猛觀註號す。京都の人。元和九年生、母は祐觀妙昌（念佛寺藏並法林寺過去帳）。少にして袋中良定の禪室に入り淨學修行にいそむ。東暉十五歳寛永十四年瓶原に於て妙覺心地祭文一卷を自筆註せしこより推察すれば、師袋中の晩年飯岡隱棲以前即ち奈良化益時代念佛寺に於て早くより出家得度せしものゝ如し。而して寛永十六年恩師袋中は飯岡に於て、八十有八の聖なる生涯を終へられたれば、東暉は十七歳にして早くも訣別の悲運に相遇してゐるのである。然しながら僅かの期間の裡にも善く勉め、十六歳名越流の宗脈傳法を稟承註し、以後刮目すべき彼の傳歴が展開したのである。即ち、寛永十九年（袋中滅後四年）九月、廿歳にして袋中上人自筆青天集一卷（大谷大學藏）を筆寫せしを始めとして、袋中上人の遺著遺墨の筆寫、校訂刊行註に從事せしもの實に二十有部、彼の自筆口傳法切紙に類するものを擧出せば、實に枚舉邊無き態にして、袋中上人遺德欣慕に捧けし彼の功勳たるや拙筆に盡し難い。

而して彼は、袋中草創に係る念佛寺第四世をつぎ、京師檀王法林寺第八世に轉註董し、法林寺常念佛註の基を創め念佛化益の裡に天和二年二月十八日六十歳にして入寂したのであるが、念佛寺に晋山せしは寛文元年五月（三十九歳）以前頃註考ふべく、法林寺に晋董せしは、寛文十年（四十八歳）三月以後の事であらう。註

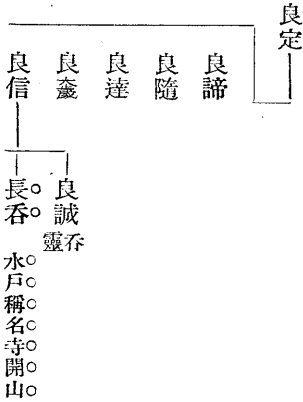
彼の著書は袋中上人傳を始めし數本あり、袋中上人を仰慕するの餘り、師の遺墨遺影を保存し、上人の遺業宣揚を生涯の責務なりと碎身粉骨せし學匠にして、袋中上人の名譽はかゝつて彼東暉の雙肩に係る活動のしからしむる所であらう。今鸞宿の總系譜により彼の法脈を尋ねれば、尊觀良辨より傳々相承して、袋中法弟のもし燦として輝き、徳川中期の史學者心阿は、

道、殘袋中傳隨東暉之四開土者蓮海之驪龍而探名越之深淵傳弘正旨而垂裕於扶桑學者憧憧往來其門一門葉又秦秦興矣(鎮流祖傳第八)

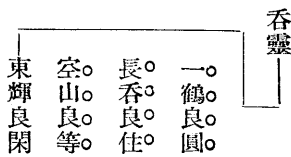
かくの如く讚評の辭を提してゐる。

今總系譜と念佛寺本と比較するに、前者は名越尊觀の系列袋中の法弟の中に明示され、後者は尊觀の系列に明示せず(附録參照)彼自ら吞靈の付弟の最後に顯示してゐる。

總系譜



念佛寺本



良仙

良圓

良聖

滿運社一廓
羽州大館一心院開山
寬永十六年二月廿二日寂

呈觀

空山
洛東袋中庵開山

東暉

扱兩圖を一見すれば、彼の法脈傳持の上に些が奇異の感無きを得ない。兩圖に現はれたる彼の法兄弟の一致する點は、右圖の如く法兄空山良等（袋中庵開山）一人にして、念佛寺本の一鶴良圓、長吞良住の二師は、總系譜同流圖に見らるゝ、良圓（滿運社一廓、羽洲大館一心院開山、寬永十六年二月廿二日寂）、長吞（水戸稱名寺開山）も同人と認めらるゝも、良圓、長吞の二人は、東暉の法兄良信の付弟の中に列記されてゐるのである。何れにしても良等、良圓、長吞（良住？）東暉は同門法兄弟と考へらるゝも、念佛寺本に見らるゝ如く、東暉は先師袋中上人を表示せずして、吞靈（正蓮社深譽）のもも悉く名越の同流を汲む法兄を明示せしは注目すべき又興味深き作圖である。

東暉は袋中の愛弟たりしこゝは寬永十六年正月十六日「貞龍へ」「空山へ」の袋中遷化二日前の遺言狀（飯岡西方寺藏）を見るも明瞭に裏書され得るし、又東暉が袋中上人思慕への傳歴より考ふるも敢て加言を要しない。

吞靈とは如何。總系譜には、先述の良信任關の付弟の中に良誠吞靈なるものを擧出す。念佛寺本に示す吞靈正蓮社深譽果して同一人であらうか。

此處に注意すべきは、袋中が弟子良等空山に與へたる「念珠并佛判」自筆切紙（圓通寺並法林寺藏二通）に關して二通と

も奥書により袋中が慶長十六年十二月京都でものせしものミ考へらる。然るに、武江東海沙門聲譽即現の口傳秘抄(清水西光)に依らば、この佛判に關して次の如き興味ある話題を提供してゐる。

慶長七年三月十五日袋中和尙御作也入唐トキ吞靈ニ授レテ玉フ。右袋中和尙眞筆ヲ即寫畢

即、佛判は、袋中上人がかねての宿願たる入明遊學決行のため岩城の教化を離るゝの直前、慶長七年三月、吞靈なる弟子にさづけしものなるを物語るものである。註10

吞靈に關するもの其他の資料何等發見出來ず些か明瞭を闕ぐ憾みはあれど、この吞靈ミは恐くは念佛寺本の正蓮社深譽のこなるべし。果して然らば、諸書に見ゆるかの東暉は袋中の法孫なる記事も、或は又彼自身、

信法之傳常通ナレドモ爲ニ意得ノ一示レ之物ニ愚僧ニ傳法五六ヶ所ニテ傳法ヲ致シ脉譜貴屋和尙ノ下ニテ取レドモ傳法ハ幡隨ノ傳法ニテ隨意岩ニ傳フ(法林寺藏東暉自筆口耳ノ卷)

の叙事、即ち傳法は數ヶ所にて傳承し、幡隨意流の傳法を、隨巖白紘(幡隨院二世、寛永十三年寂)より稟けしこも、又恩師袋中上人の生國、東北地方攝化の聖迹を訪ね、其間先師の付弟吞靈につきて、教法傳承せしこもを推察するに難くないのである。

東暉は、東北地方に於ける袋中の有力なる嗣法者吞靈に法稟し、圖示の如き法脈を表はせるものであらうと推知される。

然し乍らこの念佛寺本の圖示せる所に従へば、吞靈は貞案(天蓮社忍譽法譽付弟相即寺開山)、牛秀(應蓮社讚譽、忍譽付弟大善寺開山)の付弟、凝辰の嗣なるこも明示して、名越の法系列を顯示してゐない點は注意しなければならぬ。

凝辰(全蓮社諱貞譽)は讚譽付弟龍光寺開山ミ註解し文清、道阿、道察を始めとして吞靈に至る迄廿八人の法嗣あり

たるを示せども、その傳歴を探るに詳説すべき材料がない。

鴻巢勝願寺志並に精舍舊詞に上野國富岡龍光寺開山に貞譽註11一疑なるものあり。貞譽、凝辰註11と同人物なりやと想像するも餘りに牽強附會的、殊に一疑は應永年間の西化とあれば、年代の開きの甚だしければ、龍光寺とは同名異寺と見るべきであらう。

凝辰の付弟廿有八を數ふるも、至つて明瞭を缺ぎ、清見寺開山安譽文清、宗安寺中興教譽道阿とあれき詳らかならず。清見寺註12は精舍舊詞に明す上州吉井村西平井の清見寺のここか。開山安譽と記述するも亦明らかならず。

安國寺開山感蓮社光譽道察に關しては、鴻巢勝願寺志に明す、慈光山常照院安國寺（上野國群馬郡高崎）開山光譽道察と同人と考ふるも至當であらう。

此外凝辰一門に關する資料なく、只表圖によりて鎌倉光明寺、瀧山大善寺に繼類法脈關係を有するものなることを知るのみ。更に詳述するに由なく延いては凝辰—吞靈—東輝に至る此の間の法脈を詳述するに方法がないのである。

此處に於てか、東輝のものせる本系譜は、三部門各別譜の合綴なるもの、即宗祖法然上人以下牛秀法孫弟に至る白旗流系譜（連門宗派第二圖、嵯峨本白旗流系譜、源流章圖所收「師圖」に比較さるべきもの）の一、凝辰以下一門一統吞靈に至るの二、吞靈付弟東輝同門名越流その第三、かく考察する事が出来るであらう。

東輝が先師袋中上人の聖跡を慕ひ、關東々北遊化の砌たま／＼光明寺歷世を明す白旗流系譜、前述せる如く牛秀法孫弟の法脈、凝辰一門特に袋中上人名越法脈傳持の師吞靈の教化にあづかる同門流を附加し轉寫傳持せるものが念佛寺本系譜と云ふべきものであらう。

表圖示さるゝ部面につき云へば吞靈は白旗流の人、而して前述の如く名越流法脈の傳持者、付弟同門の堯山良往以下

東良輝閑は關東々北に於ける名越流の高調者にして且亦鎮西白旛流義に生ける人達を解釋さるゝであらう。

かくして徳川初期淨土宗教壇に於ける傳法の名越、白旛兩流混同相承即ち二元並三元の譜脈傳授に關する兼行承襲の躪を見る事が出来るのである。

五 結

奈良念佛寺藏東輝傳持の系譜（白旛流系譜）に就きては、現時流布せる蓮門宗派第二圖、嵯峨正定院藏白旛系圖、淨土源流草圖所收師圖を比較さるべき同類原本に依つて寫傳或は轉々寫されたもの云ふべく、特に念佛寺本系譜は白旛系に加ふるに名越系譜を以てし、系列、傍註の上より、他本に比してやゝ原本に近きものなるかの感を抱かしむるものもあるも、何れにしても共に鎮西流白旛系の法脈高調の譜。法水分流記、宗派流傳、血脈論と共に懷山の淨統略讚、鸞窟の總系譜の圖編集大成の元となりたるものであらう。

史的價值の上より、永和四年靜見勘録の法水分流記に比肩さるべくも無く、研究資料として如何程の價值を齎すものか疑問なるも、少くとも淨土一宗の上より論ずれば、西山派のものせる蓮門宗派第一圖（天文十七年奥）に引續き、宗派流傳（永祿三・四年奥）と共に、淨土白旛正統の法脈を高く掲げ、相承正統を圖纂し、よく後昆をして依る所あらしめた點なき欽賞すべきものが多い。

殊に本系譜は東北に於ける名越東輝門流を明示すれば、圓通寺に現存する名越流一門の總系圖（融解か）をも比較研究されなければならぬ。

又袋中は淨土血脈論を元和九年に脱稿し、當時我宗が寓宗のそしりありしに對する堂々の辯明反駁をなしたのである

が、列擧の形式、内容細註に於いて蓮門宗派とは何等交渉はない。が然しながら、東輝も元亨釋書に論するが如き淨土宗を寓宗的なそしりをもらす輩に對して、たまく得たる淨土白籤系譜に信憑し寫傳し、銳意淨土正系を標示し、系流謬亂の是正につこめしものゝ如くである。

本系譜は前述現存の同類異本諸譜と共に形式内容共に論考し、系脈源流を探るべく、(諸系譜を論及せられた山上正尊氏の淨土系譜に顯はれたる親鸞聖人佛教研究四ノ一参照すべきである。)又内容細註に至つては、寫傳誤脱並重復、系流紛亂相承不正、傍註、細註、小傳の前後の錯雜混淆等諸系譜を参照し論究すべき點は多い。

例せば本系譜に示さるゝ光明寺世代ミ、攝門纂述の鎌倉光明寺志(淨全十九所收)歴代の前後大異せるもの、

寺誌

念佛寺系譜

寺誌

光明寺 十世

(觀蓮社芳譽惠仁)……………(昇蓮社法譽智聰)——十四世

〃 十一世

(仙蓮社仁譽如忠)……………(法蓮社然譽記順)

〃 十二世

(善蓮社導譽良惠)……………(念蓮社貞譽良記)——二十一世

〃 十三世

昇蓮社澄譽……………觀蓮社長譽良把

或は嵯峨正定寺本に元錄四年湛譽了鑑が奥書に指摘せる如く、然阿の下十、因鈔三卷、寂惠の下弘、阿三年(念佛寺本は弘安)性心持阿等を始めにして傍註細註に至つては考證すべき點は數ふるに暇ない。然しながら最も注意すべき點は細註傍註にして、之を他譜と比研するに依つてのみ、その流傳源流を明すべき點が出來やう。匆忙の間ものせるもの極めて過誤多からんも東輝傳歴の全成果を期し、訂補するこころし、今は參考の爲念佛寺藏本系譜を轉載するにこころめ都合上

敢て異本この校合も略した。之を諒せられよ。(十四、五、三〇)

註 1 東暉、輝又は暉。彼自ら光局、日局等兩方共使用せしものゝ如し。法林寺藏に見ゆる自筆鈔本にて推知し得。良閑の閑

を鑣流祖傳、總系譜等に多く間の字に作るは誤謬なり。

東暉の譽號支譽はこの念佛寺系譜に始めて見らるゝもの他資料にはないもの様である。東暉和尚の家系に關しては、檀王過去帳(寛永より享保十九年頃迄の法名を載す)により、東暉和尚の母は(法名祐觀妙昌)寛文四甲辰十月十六日(東暉四十二歳の時)亡なる事を知り得。其他鼠學兄より念佛寺過去帳によつて、東暉の祖母兄弟姉妹、叔父叔母等興味ある家系を摘出して頂いたが次後發表の折轉載することにした。

2、嵯峨正定院藏書「白旗總系圖」は元祿四年七月十八日湛譽了鑑に依つて書寫されしもの。今小生は伊藤氏謄寫にかゝるものを更に轉寫せし嵐氏筆寫本に依つた。

3、淨土源流(章)圖一卷は了譽聖因の佛祖正傳眞宗略派血脈と、宗派流傳異本三、蓮門宗派二圖を收録せるもの。原本は宗教大學所藏にかゝる。今は宗大本にて山上氏謄寫したるものを轉寫せし龍大圖書館本に依つた。

4、今書寫者言此總系圖者鑣西派之内白旗所圖也西山總系圖現印行貞準訂正血脈論堂觀流總圖別一本有之外也始列二八祖一終列二圓通寺

代々一是也今此系圖了譽上人直牒所載總系圖歟作者未明或人書本直牒同付白旗上人作矣又此初四ヶ流題下有二圓蓮社一異本無之爾良順所圖歟重而決之列三後代師資一後之人列加耳今以三類本一校合檢點數回添三削之一要令三分別一雖然文字錯

亂眞僞難正若其兩本疑爲二異本付其餘極相違文學三五三二待三後學刪補一とて二三の考證問題を載せ、元祿四辛未年七月十八日今書寫三緣會下 湛譽了鑑

5、法林寺藏入唐沙門遍照金剛撰、奥書、寛永十四乙丑年春閏三月晦書寫了於瓶原筆新發、意、東暉十五歲、辨蓮社良定袋中花押
6、法林寺藏、淨土宗脈、淨土鎮西義蓮導寺流隨自意法門相傳略文によらば、寛永十五寅十二月廿五日、入觀袋中より裏。
7、檀王法林寺には袋中の著書、自贊肖像等の東暉の裏書奥書せるもの實に枚舉に遑なし。省略す。法林寺發刊の檀王誌、袋中に關する嵐、江藤、藤堂各氏の述作、横山氏琉球神道記等參照。

8、總系譜には洛東法林寺第四世と云ふも、念佛寺第四世にして法林寺第八世の誤。(兩寺過去帳)

9、念佛寺藏佛說母子經の奥、袋中識語、歌の後に東暉の筆にて「當寺開山善叟法師……」寛文元年五月廿八日、南都念佛寺第四世良閑東暉謹誌とある所より推定。法林寺七世成蓮社良觀は寛文十庚戌年三月廿一日寂。(法林寺過去帳)

10、袋中は吞靈に慶長七年三月宗義肝要を口傳し、直ちに郷里出發早くも四月には兄以八の住居地嚴島光明院を訪問し渡支遊學の志を述ぶ。(袋中上人餘光收上人年譜參照)念珠佛判の奥書の異り等は横山氏著琉球神道記參照

11、念佛寺本に貞譽凝辰、龍光寺開山と註記す。龍光寺を尋ねるに、鴻巣勝願寺末に

御朱印廿六石

上野國甘羅郡富岡 宮崎山寶國院龍光寺

開山貞譽一疑上人應永十一年三月廿四日化、中興廿五世清譽覺翁御朱印被下とあり。(淨全二〇所收攝門の勝願寺志)

續淨全十九所收蓮門精舍舊詞四七に云ふ。龍光寺、同末西上甘樂郡富岡村、宮崎山寶國院、開山貞譽一疑生所姓氏不知三

月廿四日筑紫寂。云々

12、精舍舊詞四七(續淨十九)清見寺、上州緣埜郡吉井村西平井、天龍山淨光院開山、安譽。